

『曾禰好忠集』所収「好忠百首」の本文異同について

——古写本三種による比較——

南里一郎

平安時代中期の歌人、曾禰好忠の家集『曾禰好忠集』（以下『好忠集』とする）は、百首歌という形式の創始である「好忠百首」と、これへの返歌という「順百首」を構成要素として持つ。「好忠百首」は好忠の作であるが、「順百首」は源順の作とされている。この二つの百首歌は内部構成をほぼ同じくし、全体として贈答とみられるため、成立時期も隔たらないと考えられる。

「好忠百首」と「順百首」とについて、『好忠集』の主要伝本である鎌倉時代の古写本三種「天理本」「書陵部本」「資経本」における本文異同を検討した。すると、異文の出現数や伝本ごとの傾向に大きな違いが認められた。このことは、「好忠百首」や「順百首」という『好忠集』の部分ごとにとみると、本文の性格が均質ではないことを想像させる。現存『好忠集』にまとめられるまでの流布や伝来の事情に差があることを強く示唆する。

また、それぞれの伝本に見られる異文には、本来の形を保つと思われるものから、定型表現に引かれた結果生じたもの、単純な誤写まで、さまざまなものがある。一首ごとの細かい検討が必要である。

一 はじめに

本稿は、『曾禰好忠集』（以下『好忠集』とする）に収められた百首歌の一つ、いわゆる「好忠百首」の本文異同について述べる。筆者は以前、同じく『好忠集』に収められた「順百首」における異同について考察したことがある。<sup>1</sup> その結果をふまえ、「好忠百首」について同様に鎌倉時代の古写本三種によって本文を比較したところ、異文の出現傾向に差異が認められた。

以下、曾禰好忠や「好忠百首」、『好忠集』の伝本、内部構成などの事項を概観したのち、三種の伝本に含まれる異同の数を確認する。最後に実際の用例を検討する。

## 二 「好忠百首」と『好忠集』の伝本

曾禰好忠は後撰集時代の歌人として知られ、『拾遺集』以下の勅撰集に九十三首入集する。出自などは不明で、延長元年(九二二)ごろ生まれ、長保五年(一〇〇三)ごろ没したとみられる。およそ百首の歌によって構成された「好忠百首」を作り、これによっていわゆる百首歌という形式の創始者とされる。「好忠百首」に依じて順が詠んだ百首歌が「順百首」である。この二つの百首歌はいずれも『好忠集』に収められている<sup>②</sup>。

本文の比較検討に用いた『好忠集』の伝本は以下の三種である。本稿で使用するそれぞれの略称とあわせて示す。

- 一、天理大学図書館蔵尚書禪門奥書本『曾禰好忠集』  
……天理本
- 二、宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆本『好忠集』  
……書陵部本
- 三、冷泉家時雨亭文庫蔵藤原資経筆本『曾禰好忠集』  
……資経本

書写年代はそれぞれ、天理本は鎌倉時代中期、書陵部本は鎌倉時代末期、資経本は鎌倉時代後期と考えられている<sup>③</sup>。これらで、流布本の代表的本文とされる天理本と、それに対する異本

系の代表的本文とされる書陵部本とを底本として複数回の注釈が施された<sup>④</sup>。さらに、近年の冷泉家時雨亭文庫における調査により、新たな完本として資経本が紹介された<sup>⑤</sup>。これを加え改めて本文研究や注釈を行うべき意義が生じている。

## 三 『好忠集』の構成

本節では『好忠集』の構成についてふれ、「好忠百首」「順百首」という二つの百首歌が『好忠集』内部でどのように配置されているか確認しておく。

『好忠集』の構成は次のようになっていいる。現存の主な諸本はいずれも同様の構成であるため、同一祖本から出たものと考えられている。歌数は資経本によった。

- 一、毎月集(三百六十首歌) ……三六八首
- 二、好忠百首(百首歌) ……一〇三首
- 三、つらね歌 ……一四首
- 四、順百首(百首歌) ……一〇〇首
- 五、後人による増補歌 ……三首

これらのうち、もともと成立の古い部分が「好忠百首」とされる。これに影響を受けた、いわゆる「惠慶百首」(『惠慶集』所収)の序にある記述によって天徳末年(九六一)ごろの成立

と考えられている。

先に述べたように、好忠は「好忠百首」を源順にあてて贈ったとみられ、順はこれに応じて同様の構成の百首歌を詠作している。これが「順百首」である。『好忠集』に収められているため、この部分も好忠の作とみる向きもあったが、順の作とみるのが穏当であろう<sup>6)</sup>。

このように、関連の深い「好忠百首」と「順百首」との間に、やや時代の下る「つらね歌」が挟まる構成になっている。この形に編纂する際に、好忠作による歌群を家集の前部にまとめて配置しようという意識があったのであろう。

こうした配列ではあるが、百首歌の序文の記述や百首内部の構成からみて、「好忠百首」からさほど時をおかずに「順百首」が成立したと考えるのが自然である。その後、両者はどのようにな流布し、現存『好忠集』に収められたのであろうか。二つの百首歌の流布や伝来の状況などを考えるためには、古写本間の本文の比較検討は意義があろう。ひるがえって、三種の古写本の本文の性格についても知見が得られるかもしれない。二つの百首歌は含まれる歌数のみならず構成もほぼ同じであり、異同の数や質を比較するのに好都合である。

なお、『好忠集』の歌群のうちでは「毎月集」の部分をもっとも歌数が多い。そのため、全体の異同傾向を見るにはこの部分

も検討する必要があるが、本稿では手始めに百首歌の部分によって考察する。

#### 四 「好忠百首」の構成

本節では、問題とする百首歌の内部構成について述べる。「好忠百首」「順百首」の両者とも、「百首歌」とは称するものの、本来的には次のような構成による一〇一首であったと推察される。

- 〈一〉序文
- 〈二〉春・夏・秋・冬・恋の歌 ……五〇首
- 〈三〉安積山・難波津の杳冠歌 ……三一首
- 〈四〉十干・方位の物名歌 ……二〇首

前半には勅撰集の二大テーマといえる四季・恋の歌を、後半には技巧的な歌を配置するという構成である。まず、全体に関わる〈一〉序文があり、続いて〈二〉「春」「夏」「秋」「冬」「恋」の各題それぞれ一〇首ずつが置かれる。次いで、〈三〉〈四〉という種類の異なる技巧によった歌が置かれる。〈二〉杳冠歌は歌の父母といわれる「安積山」歌と「難波津」歌との各三十一文字を歌の初めと終わりに据える。〈三〉物名歌は、「きのえ」以下の十干と、「ひと日めぐり」「ひと夜めぐり」（いずれも太白神のこと）、「ひんがし」以下の方位の名を詠み込んでいる。

一〇一首が本来であろうと述べたが、実際は伝本によって歌の出入りがあるなどし、歌数に増減がある。具体的には「好忠百首」の春部において、書陵部本では一〇首あるものの、天理本では一一首、資経本では一二首ある。一方、「順百首」では本稿で扱う三本すべてについて秋部が九首である。

そのため、本稿における以下の考察では出入りのある歌を除くことにする。「好忠百首」の春部では三本すべてに存在する歌は九首であり、その結果全体で一〇〇首が検討の対象となる。歌の出入りがあること自体が大きな異同であるが、問題が複雑であるため本稿ではこの点については扱わない。また、「順百首」も、前述した秋部の歌数により、全体で一〇〇首となる。

歌本文のみを対象とし、さらに本行本文の異同のみを扱う。書陵部本や資経本には校合や修正を施した傍書が豊富にあるが、これについては扱わない。同様に、序文や題詞、集付の有無などの異同についても扱わない。

## 五 異同数の比較

前稿<sup>〔7〕</sup>において、「順百首」の範囲で三本の本文を比較した結果として、資経本で独自異文が多いことを報告した。したがって、この範囲に限れば、流布本系・異本系として対立的に把握され

てきた天理本と書陵部本の本文が比較的近いことになる。同時に、新出の資経本が有する本文の重要性が明らかになった。本稿の主眼である「好忠百首」の範囲との比較のために、改めて「順百首」における異同の数を確認する。

「順百首」に含まれる一〇〇首の本行本文について三本を比較した結果は以下のとおりである。異同のある歌は五六首であった。異同総数は七二箇所である。それぞれの本の独自異文の数は、天理本で一七箇所、書陵部本で七箇所、資経本で四六箇所である。三本すべてで異なるものは二箇所であった。明らかな誤写や、「すぐす」「すごす」のような軽微な異同も除外していない。それぞれの伝本を〈天〉〈書〉〈資〉と略して箇条書きで示す。

### ▽順百首

合計72か所

〈天〉が独自異文、〈書〉〈資〉で一一致	……17
〈書〉が独自異文、〈天〉〈資〉で一一致	……7
〈資〉が独自異文、〈天〉〈書〉で一一致	……46
〈天〉〈書〉〈資〉の三本すべてで異文	……2

一方、「好忠百首」では、異同を含む歌は八三首で、異同総数は一六〇箇所であった。それぞれの本の独自異文の数は、天理本で三九箇所、書陵部本で八四箇所、資経本で二六箇所である。三本すべてで異なるのは一一箇所であった。同様に示す。

## ▽好忠百首

合計160か所

〈天〉が独自異文、〈書〉〈資〉で一致	……39
〈書〉が独自異文、〈天〉〈資〉で一致	……84
〈資〉が独自異文、〈天〉〈書〉で一致	……26
〈天〉〈書〉〈資〉の三本すべてで異文	……11

右のように、同じ構成・歌数ではあっても異同の出現傾向がまったく異なっている。「順百首」と比較して、「好忠百首」では異同を含む歌は約一・五倍、異同の数は二倍以上である。「好忠百首」の本文の方が、格段に不安定であるといえる。また、独自異文も「順百首」では資経本が多く、「好忠百首」では書陵部本が多い。このように数値に現れた傾向の違いから、次のような事情が想定できようか。

『好忠集』が現存の構成にまとめられる際に用いられた二つの百首歌は、流布や伝来の事情を異にしていたのであろう。すなわち、全体で贈答の関係となる百首歌ではあっても、当初から一体となって流布していたとは考えにくい。

それぞれ個別の「作品」として意識され流布したため、異なる転写過程を経た本が存在したであろう。そもそも、「好忠百首」「順百首」の成立事情から推すと、好忠と順の間で相手に贈った完成本と、手元に残した控ええないしは草稿本というように、成立当初から本文の多少異なるものが存在していた可能性

もある。それぞれが別由来のものとして、異なる伝来の過程を経ることも考えられよう。

それらのうちある系統の本が、ある時点で現存『好忠集』の構成にまとめられる際に使用された。さらに、現存の構成が成った後でも「好忠百首」や「順百首」の部分のみ他本で校訂することもあったかもしれない。

## 六 異同の質的検討

本節では「好忠百首」について三本の本文を比較し、異同の実例を挙げる<sup>8)</sup>。各本の独自異文や三本で異なる例から、本文の性質について考察する。ただし、どの本が本来の本文を有しているかなどといった評価は難しい。現状ではさまざまな層が保存されているらしいということがうかがえる程度である。

前節で述べたように、独自異文のもっとも多かったのは書陵部本で、次いで天理本であった。したがって、「好忠百首」の部分に限れば、天理本と資経本の本文が比較的近いことになる。

天理本・書陵部本・資経本の本文をそれぞれ「天」「書」「資」という略号をもって掲げる。天理本の本文の下に漢数字で『新編国歌大観』による『好忠集』の歌順番号を示す。書陵部本・資経本に見られる傍書は、用例の掲出にあたっては省略した。

まず、「順百首」において異文の多かった資経本の本文に着目して例を挙げる。前節で述べたように「好忠百首」の範囲では資経本に独自異文が少なかった。そのうえ明らかかな誤写や評価が困難な箇所を除くと、これといった例に乏しい。その中でも次の例は資経本の本文が本来的なものであるといえそうである。

天 人はみなみしもき、しもよのなかにあるはあるかとなきは  
なしとか (四六五・みなみ)

書 人はみなみしもき、しもよのなかにあるはなりとかなきは  
なしとか

資 人はみなみしもき、しもよの中にあるは有とかなきはなし  
とか

資経本の第四句は、結句との対応から「あるはありとか」と読むのである。書陵部本の本文は仮名の「あ」を「な」に誤写したものとみられる。天理本の本文は漢字表記の「有」を媒介として、これを「ある」と読んだ結果、「とか」を「か」と転倒させたのであろう。

次は、天理本に見られる異文の例を挙げる。

天 かきくらすこ、ろのやみにまとひつ、うしと見るよにふる

そわひしき (四二五・杳冠)

書 かきくらす心のやみにまとひつ、うしとみるよにふるかわ  
ひしき

資 かきくらすこ、ろのやみにまよひつ、うしと見るよにふる  
かわひしき

いずれの本文でも文法的には問題ないが、この歌は三一首ある杳冠歌の第六首であり、結句末を「さ」で止めるという制約がある。したがって、書陵部本・資経本の「：わびしき」が本来的な本文であると考えられる。しかるに、天理本では結句末が「：わびしき」であり、これと合わせたように「ふるぞ：」となっている。つまり、係り結びの定型としては整っているが、杳冠歌としては誤写であらう。

右と同じように、呼応関係が整っている異同の例としては次の歌がある。

天 人つまとわかのとふたつおもふにはなれこし、そてはあはれ  
まされり (四五八・かのと)

書 ひとつまはわかのとひたつおもふにはなれにし袖そあはれ  
なりける

資 人つまとわかのとふたつおもふにはなれにしそてそあはれ

なりける

この例では、どちらが本来的な本文か判別できないが、「は」「ぞ」の異同が結句末「…り」「…ける」という異同と整合性を保っている。

二句にわたる異同の例としては、次の歌がある。

天 きみこふとしのひにひくくに身をやきてかせのあなつるはひと  
なしてん (四一七・恋十)

書 きみこふとしのひに身をやこからしのかせのあなつるはひと  
となしてむ

資 きみこふとしのひに身をやこからしのかせのあなつるはひと  
となしてん

天理本の第二句「しのびしのびに」は、次のように『古今集』や『伊勢集』に例が見え、それらからの影響があらうか。

みちのくのあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこしの  
びしのびに (古今集・神あそびのうた・一〇七八)

うつせみのはにおくつゆのこがくれてしのびしのびにぬる  
るそでかな (伊勢集・四四二)

一方、書陵部本・資経本の「身を」「こがらし」については、『古今六帖』に次の例がある。『古今六帖』は「好忠百首」と成立時期が近いと考えられるので、時代性など何らかの関連を想定できようか。

人しれぬおもひするがの国にこそ身を木がらしのもりはあ  
りけれ (古今六帖・第二・一〇四七)

次は三本で異なる本文の例である。これは天理本の本文が本来的であると思われる。

天 のかひせしこまのはるよりあさりしにつきすもあるかなよ  
とのまこもの (四四八・杳冠)

書 のかひせしこまのは、よりあさりしにつきすもあるかなよ  
とのわかこもの

資 のかひせしこまのはるよりあさりしにつきすもあるかなよ  
とのわかこもの

右の歌は杳冠歌の第二九首で、結句末を「の」で止めるという制約がある。この制約と音数律との両方の条件に合うのは天理

本の形である。資経本の形は次に示す『古今集』七五九番歌に同一の句が見え、それに引かれたための誤りか。沓冠歌であることを忘れてゐるかに見える。

山しろのよどのわかごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはか  
なき  
(古今集・恋五・七五九)

また、書陵部本の形は文字制約の条件を満たすため、資経本の形に「の」を付加したかのようなのである。ただ、そのために八音になってしまっている。

最後に、書陵部本に異文のある歌の例を挙げる。

天 せみのはのうすらころもなりゆくになとうちとけぬやま  
ほと、きす  
(三三三・夏十)

書 せみの葉のうすらころもなりにしをなとうちとけぬほ  
と、きすそも

資 せみのはのうすらころもなりゆくになとうちとけぬほ  
と、きす

天理本・資経本の結句「やまほととぎす」という句は、次のように『古今集』夏部冒頭の「三五番歌をはじめ、たいへん用例

の多い句である。後に挙げた『古今集』一五七番の忠岑詠は右の好忠詠と同じく結句で用いられている。

わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかも

(古今集・夏・一三五・読人不知・題不知)

くるるかと思ればあけぬるなつのよをあかずとやなく山郭  
公  
(同・一五七・忠岑)

これに対して書陵部本の結句にある「ほととぎすぞも」は同時代までに例を見ず、後世にも『為忠家後度百首』二二二番歌の一首が見出せる程度である。ただし、「ぞも」で止める歌は万葉集に数多くあるほか、次のように『古今集』にも例がある。

色よりもかこそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅  
ぞも  
(古今集・春上・三三三)

好忠自身「しるらめやぞも」という句を、『好忠集』一六番・四一四番の二首に用いている(異同なし)。よって、一般的とはいえない形であっても「ほととぎすぞも」が本来の形であった可能性はある。

さらに、この三三三番歌の直前、三二二番歌の第四句に「や

まほととぎす」がある。天理本・資経本の本文はこれに引かれたという可能性も考えておかねばならない。

天 なつころもきときになれとわかやとにやまほととぎすまた  
そこゑせぬ (三八二・夏十)

先の三八三番歌は結句を「やまほととぎす」と体言で止めるか、「…ぞも」と詠嘆するかという、感動表現の形式が異なる例と捉えられるものであった。しかし、次は歌一首の趣を変えてしまう異同の例である。

天 くもりなきおほうみのはらをとふとりのかけさへしるくて  
れる月かけ (三八七・夏十)

書 くもりなきあをみのはらをとふとりのかけさへしるくて  
る夏かな

資 くもりなきおほうみのはらをとふとりのかけさへしるくて  
れる月かけ

「おほうみの」と「あをみの」の違いもさることながら、結句を含めて見ると、詠まれた景に昼か夜かの違いがある。書陵部本の結句「てれる夏かな」は、『好忠集』の「毎月集」にある歌に

見える。天理本の本文で示す。

あかねさしいはとのやまも見えぬへくめをきはめてもてれ  
るなつかぬ (好忠集・一四八)

この結句に異同はない。同様に、明るく照る夏の陽光を詠んでいる。百首歌で用いた表現を、後に毎月集でも用いたということは考えられよう。

これに対して「てれる月かけ」と同一の句は後世の例がわずかにあるのみで、同時代以前には見えない。しかし、別の表現ならば夏の月影を詠んだ歌はある。

夏の夜の霜やおけるとみるまでに荒れたる宿を照す月かけ  
(寛平御時后宮歌合・五〇)

あたらしくてる月かけにほととぎすふるごゑしるくなきわ  
たるなり (躬恒集・一一〇)

右のような先例を踏まえた歌として三八七番歌を見ると、天理本・資経本の本文「てれる月かけ」も有力なものともみることができようか。

次は、「けふ」「けさ」という異同の例である。春部冒頭と夏

部冒頭の二箇所に見える。

天 きのふまで冬こもれりしくらふやまけふははるへとみねも

さやけみ (三六九・春十)

書 きのふまでふゆこもれりしくらふ山けさははるへとみねも

さやけみ

資 きのふまで冬こもれりしくらふ山けふははるへとみねもさ

やけみ

天 はるかすみたちしはきのふいつのまにけふはやまへのすく

ろかるらん (三八〇・夏十)

書 はるかすみたちしはきのふいつのまにけさは山へのすくろ

かるらん

資 はるかすみたちしはきのふいつのまにけふはやまへのすく

ろ<sup>讀</sup>るらむ

天理本・資経本では「けふ」という本文になっているが、書陵部本では「けさ」である。単純な誤写の可能性もあろうが、こは用例が複数あることから、書陵部本の独自性として捉えることができる。天理本・資経本の本文が「きのふ」「けふ」の対比と読めるのに対して、書陵部本の本文では春部・夏部の冒頭

に置かれた歌として「(昨日と変わって)この朝は」という時間意識を明示している。書陵部本の本文の特徴として意識しておくべきであろう。

もつとも、多くの書陵部本の独自異文のうち、単純な誤写と思われる箇所も少なからず存在する。いわば書陵部本の「傷」とおぼしき点としては、重要な箇所が二つある。一つは、物名歌の中ごろ「ひと日めぐり」「ひと夜めぐり」の歌が他本と逆順になっていること、もう一つは、百首の末尾、「うしとら」を題とする物名歌が、片仮名書きで行間に補われていることである。

後者はあるべき歌を書き入れたものなので、書き落とした歌を後に修正しようとした結果であろう。では、前者についてはどちらが本来的か。歌の内容をもとに考えてみる。「ひと日めぐり」「ひと夜めぐり」は、いずれも陰陽道の神「太白神」の別名という。この二首を天理本の本文で掲出する。

#### 一日めぐり

さためなくひと日めぐりにめくるてふかみのやしろやいつ

こなるらん (四六一)

#### ひとよめぐり

みし人よめぐりたにこはありへてもなのなかのしみつむすぶ

とやみん (四六二)

この「ひと日めぐり」の歌は厳密な意味では物名を詠み込んだとはいいがたく、「定めなく一日めぐりにめぐるとふ神」と、遊行する太白神そのものを詠んでいる。「ひと夜めぐり」の歌の次からは、太白神の遊行順に「ひんがし」から「うしとら」までの八方を詠み込んだ物名歌であり、ここでの「ひと日めぐり」の歌は、内容からこの部分の見出しとでもいうべき働きを負っているとみられる。それゆえ、「ひと日めぐり」の歌は、方位を詠んだ一連の物名歌の冒頭に置かれるべきであり、これが「ひと夜めぐり」の後、すなわち逆順となっている書陵部本の形は本来のものではなからう。「順百首」「恵慶百首」においても、「ひと日めぐり」「ひと夜めぐり」の順である。

書陵部本には、このように明確な傷といえる箇所があるものの、一方で天理本よりも優れているとみられる箇所もある。その一つに杳冠歌を導く序の部分<sup>10</sup>が挙げられる。西耕生氏は、杳冠歌の序文について、天理本と書陵部本の本文では書陵部本のほうが「あるべき本来の姿をとどめ伝えている」とする。従うべきであろう。

さらに、この序文は漢字仮名の表記の違いを除けば、書陵部本と資経本とでまったく同文である。歌の部分での比較では天理本と資経本とが比較的近い本文を有していたが、杳冠歌を導

く序文では天理本だけが異なる本文である。三本の本文の生成過程における事情の複雑さを示す事例として指摘しておく。

## 七 おわりに

以上、『好忠集』所収「好忠百首」について、天理本・書陵部本・資経本という鎌倉時代の古写本三種による本文異同を検討した。その結果、関連の深い「順百首」とは異同の含まれる傾向が大きく異なっていた。このことは、二つの百首歌が『好忠集』内部に配置される以前の流布や伝来の事情の違いを反映しているものであろう。両者が一体となって流布するようになるのは、『好忠集』が現在の構成にまとめられて以後のことであったか。また、「好忠百首」「順百首」の独立性を考慮すると、現存『好忠集』の構成が成った後も、部分的に由来の異なる伝本と校訂した可能性も想定できよう。

また、それぞれの伝本の持つ異文にはそれぞれ見るべきところがあり、本来の形を保つとみられる例がある。その一方で、定型表現に引かれて異文を生じた箇所があるようである。単純な誤写とみられる箇所もある。このように、さまざまな層が混在しているというのが実態である。一首ごとの細かい検討が求められるよう。

前稿で考察した「順百首」と、本稿で扱った「好忠百首」の歌数の合計は二〇三首であり、『好忠集』全体の歌数五八八首（資経本）の三分の一程度にすぎない。古写本三種における『好忠集』全体の異同傾向を理解するには、もっとも歌数の多い「毎月集」三六八首について検討する必要がある。これについては別稿を期したい。

#### 附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一部である。

#### 注

- (1) 南里一郎「曾禰好忠集」所収〈順百首〉の本文について（筑紫平安文学会『順百首全釈』歌合・定数歌全釈叢書十八、風間書房、二〇一三年五月）。
- (2) 福田智子「源順の人生と百首歌」（筑紫平安文学会『順百首全釈』歌合・定数歌全釈叢書十八、風間書房、二〇一三年五月）。
- (3) 天理図書館善本叢書部第四卷『平安諸家集』（八木書店、昭和四十七年五月）、神作光一「曾禰好忠集の研究」（笠間書院、昭和四十九年八月）、冷泉家時雨亭叢書第六十五卷『資経本私家集一』（朝日新聞社、一九九八年二月）。

- (4) 天理本を底本とする注釈は、神作光一・島田良二「曾禰好忠集全釈」（笠間書院、昭和五十年十一月）、松本真奈美校注「曾禰好忠集」（和歌文学大系54『中古歌仙集（一）』明治書院、平成十六年十月）がある。また、書陵部本を底本とする注釈は、松田武夫校注「好忠集」（日本古典文学大系80『平安鎌倉私家集』岩波書店、昭和三十九年九月）、川村晃生・金子英世編『曾禰好忠集』注解（三弥井書店、平成二十三年十一月）がある。

- (5) 資経本のほか、完本として「承空本」も紹介された。両者の本文はごく近い関係にあるとされる。冷泉家時雨亭叢書第七十一巻「承空本私家集下」（朝日新聞社、二〇〇七年六月）参照。また、筑紫平安文学会『順百首全釈』（歌合・定数歌全釈叢書十八、風間書房、二〇一三年五月）は、資経本を底本とし、承空本を対校本の一つに採用した「順百首」の注釈である。

- (6) 注2参照。

- (7) 注1参照。

- (8) 『好忠集』本文の引用は以下の影印による。天理本は天理図書館善本叢書部第四卷『平安諸家集』（八木書店、昭和四十七年五月）、書陵部本は国文学資料館所蔵マイクロフィルム、資経本は冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』（朝日新聞社、平成十五年十二月）である。漢字・仮名・踊り字も変更せず、濁点も振らない。また、その他の歌集についてはすべて『新編国歌大観』の本文によった。

- (9) 西耕生「あさか山難波津」の杵冠歌をみちびく序―曾禰好忠集本文復元私按―（『文学史研究』50、二〇一〇年三月）。

## 参考文献

- 川村晃生・金子英世編『曾禰好忠集』注解』（三弥井書店、平成二十三年〈二〇一一年〉十一月）
- 神作光一『曾禰好忠集の研究』（笠間書院、昭和四十九年〈一九七四年〉八月）
- 神作光一・島田良二『曾禰好忠集全釈』（笠間書院、昭和五十年〈一九七五年〉十一月）
- 島田良二編『曾禰好忠集 宮内庁書陵部蔵 伝冷泉為相筆』（笠間書院、昭和四十七年〈一九七二年〉四月）
- 筑紫平安文学会『順百首全釈』（歌合・定数歌全釈叢書十八、風間書房、二〇一三年五月）
- 天理図書館善本叢書和書之部第四卷『平安諸家集』八木書店、昭和四十七年〈一九七二年〉五月
- 西耕生『あさか山難波津』の杵冠歌をみちびく序——曾禰好忠集本文復元私按——』（『文学史研究』50、二〇一〇年三月）
- 松田武夫校注『好忠集』（日本古典文学大系80『平安鎌倉私家集』岩波書店、昭和三十九年〈一九六四年〉九月）
- 松本真奈美校注『曾禰好忠集』（和歌文学大系54『中古歌仙集（一）』明治書院、平成十六年〈二〇〇四年〉十月）
- 冷泉家時雨亭叢書第十五卷『平安私家集二』（朝日新聞社、一九九四年六月）
- 冷泉家時雨亭叢書第六十五卷『資経本私家集一』（朝日新聞社、一九九八年二月）
- 冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』（朝日新聞社、

二〇〇三年十二月

冷泉家時雨亭叢書第七十一卷『承空本私家集下』朝日新聞社、二〇〇七年六月

